

神 の 問 題

——現代神学の諸相において（その1）——

雨 貝 行 磨

神が存在しないならば、もちろん神が存在することを証明することは不可能である。そして、もし神が存在するならば、証明しようとするのは愚かである。 S・キルケゴール

（一）

われわれが、神とは何かの問いを提出するとき、われわれは、その問う自己そのものを、この問いに直面させることを要請される。なぜなら、それは神についての言表を、客観的に確定し、その述語をいかにして知性に認知させるかを意味するものではなく、むしろ、この問われている事態とともに、この事態に関与し、そのことによって、関与する自己の方向を確認することを迫られる問いに直面することであるからである。したがって、ここでは問うものは、問われている事態から、問いかけられるものとなっていることを知るべきである。このような構造の相互連関においてのみ一定の方向性を確認できる。ここでは自己の問いの方向を知らずに、あるいは保留して、一定の命題を法則化し、主題を客観化してはあきらかにならない。命題の法則化と主題の客観化とにおいては、事態を《確定》して《説明》することはできても、問いつづける持続性のなかで《関与》と《理解》とに連関することはできない。そこでは《承認》はあっても、《告白》はない。すなわち、主題そのものによって方向づけられ、その出来事のかかわりにあることはできない⁽¹⁾。《確定》したものを《承認》することによって《処理》してしまう方向では、いかなる出来事も《過去》の《史実》となってしまう。

われわれが神の問題を問うとき、このことを忘れてはならない。

(二)

啓蒙思想は、正確に、人間の理性的性格、意志の自律をもって出発した。ここでは《啓蒙とは人間が自らの責で招いた未成年の状態から抜けでること *der Ausgang von der Unmündigkeit* である。未成年とは他人の指導なしには自らの悟性を使用する能力のないことを言う。……汝自らの悟性を使用する勇氣をもて。》⁽²⁾であった。ここでは、宗教はその真理的価値の理性的基準によって決定され《無神論ではなくて偶像礼拝が、不信仰ではなくて狂信が⁽³⁾》排撃されるのである。そして、キリスト教を問うとき、その普遍的な真理と、その合理性に⁽³⁾応じて寛容が発見され、理性の本来的な属性に従ってキリスト教は宗教としての拡大した。このようにして、カント以来の規定《聖書釈義の方法 *hermeneutic sacra*》に関して《われわれ自身の(道徳的・実践的)理性を通じて語る神が、この神の言葉の誤りのない、普遍的に理解可能な解釈者であり、それ以外に(たとえば歴史的方法といったような)信頼しうる神の言葉の解釈者は存在しえない。なぜなら宗教は純粹に理性の事柄だからである》《われわれの内なる神 *der Gott in uns* そのものが解釈者である。なぜならわれわれは、われわれ自身の悟性とわれわれ自身の理性を通じてわれわれと語る解釈者以外のだれをも理解することはできず、またわれわれに与えられた教理の神性は、われわれの理性の概念が純粹・道徳的であり、それゆえに誤りのないものであるかぎり、それらの概念による以外のなものによっても認識されえないからである。》⁽⁴⁾かくて、カントにおいては、神の認識は、神を人間理性において内在化することによって遂行しようとしたのである。したがって、カント以来の批判主義にみられる《神》を理念の領域に、回復しようとすることによって、《理性の犠牲》すなわち知性を放棄することを拒絶した。そして、《理性的人間の復権が相対的秩序においてなされたが、絶対的条件のうちのみ到来する超越的な歴史的啓示が後退した》⁽⁵⁾といわれる。

それでは、理性的人間の復権が、いかにして歴史的啓示を後退させたのか。

ハイデガーによれば、西欧形而上学の歴史は、《世界像の時代 *Die*

神の問題

Zeit des Weltbildes》に依拠しているという。《世界像とは本質的に理解すれば、世界についての一つの像を意味するのではなく、像としてとらえられた世界を意味する》⁽⁶⁾。《像としてとらえる》とは、それ自身を自己の眼前にたて、そのようにたてられたものとして、たえず自己の眼前にもつことを意味する。眼前に表象的にたて、こちらにたてる人間によってたてられる限りにおいてはじめて存在しているものであるととらえられる。まさに表象されてあること Vorgestellenheit において探求され、対象化 vor-stellen される。かくて人間は、真理の主題を、自己の知識 Wissen によって知られたものとして確保することによって、確実性 Gewissheit とする。知性による対象化と、主題の確実性とは対応する。そしてこの知性こそ、すべてのものの関与の中心 Bezugmitte となる。《神》の主題も、知性の認識の対象となって、他の諸々の文化的諸価値と等根的に存在するものとして確認されるものとして世界一内一存在となる。《このような神に対して、人は祈ることもできないし、献身することもできない》⁽⁷⁾。

理性の領域において、宗教としての神を回復した時、事態をある特定の特殊領域に限定せしめて、むしろ疎外状況は依然として微動だにしない。

かくて、《現代という世界の時代の特徴的なことは、すこやかなるものの次元 Dimension des Heilen が閉ざされていることにある》⁽⁸⁾この時代 Weltalter は《乏しき時代 dünnfütige Zeit》である。これは世界の夜が、その暗黒を拡大する時であり、神の不在 Wegbleiben Gottes, 神の欠如 Fehl Gottes を示すものである。西欧において神学は、大きな神忘却をした。これは《神の蝕》とよばれるべき事態であって、直線的な神の實在の否定・神の實在の無意味性を語るものではない。しかしなお依然として否定しえないものは、《哲学者に襲い来るものは神の不在である》⁽⁹⁾。

それでは、いかにして《神の主題》を回復しうるのか。

(三)

《神の蝕》と呼ばれる現代において、いかにして《神学の主題》をさ

ぐりうるだろうか。

R・ブルトマンは(1884～1976)《神について語ることは、いかなる意味をもつか》(1925年)⁽¹¹⁾の論文において、もし、われわれが神に関して von Gott 語る場合、神があたかも諸対象物のひとつであるかのように語る über Gott のは、無意味であるばかりか罪の業ですらあるという。なぜなら、神について語ることが行われた瞬間に、神は《対象》となり、語りかけ給う神は失なわれ、《対象》は《偶像》となるからである。神を《偶像》と等置することは、神の前で犯す根源的な罪の業である。われわれにとって《神》は、それに関して語る者をも決定する現実である。従って、われわれが、神を《対象》として、それについて語りつけて、それについての知識を獲得、蓄積してたとしても、それは、すでに《神》ではない。思考の《対象》として直接法の述語となるとき、この観念は、現実性から遊離する。《神》は、われわれの側から追考し、そのことによって、その全体像を確認し、その本質を観念として確定することはできない。われわれは、神そのものについては何ものも知りえないのである。しかし、神が、信仰の決断、すなわち《神》という《汝》のなかに語りこまれている《我の実存》にとってなにを意味するか、神が、愛において、人間に為し給う事柄を理解することはできる。《神について現実に語るためには、人間の実存について、そのひとにとって神が信仰によってなんらかの意味をもつ人間の実存について語らなければならない。⁽¹²⁾》。

神は、決定的に、人間の主観において整合的に処理されるべきではない。それゆえ客観的・对象的に確認されるべきものではなく、人間実存において証言さるべきものである。証言とは、証言するものにとって、絶対的他者であるものが語りかけ、それに、徹底して応答することをのみ内実とする。そしてその応答においてのみ自己の存在根拠がある。他者から語られることによってはじめて自己は自己となる。証言とは、このようなしかたの《言の出来事》であるといつてよい。かくて、《神は、わたくしに——もちろん神の実存においてわたしを変革させつつであるが——出会う限り、わたしの外にある。⁽¹³⁾》。

神は、等根的な文化諸価値と共に処理可能な所与性 Vorgegebenheit

神 の 問 題

としてのものではなく、《言の出来事》において《わたしの外》にある現実性 Wirklichkeit である。

《確かに、神について語ることはできないが、しかし、人間に対する、ただ神によってのみ創りだされた関係が成立し、神がわれわれに語りかけ、神によってしかれた、責任あるパートナーシップがいまやある。》⁽¹⁴⁾神について、われわれが、なにかを知ったりすることはできないが、神が、《汝》として語りかけ、それに、《我》として応答し、聞き従う。永遠の対立を神の側から越えて、語り給うところに、イエス・キリストはある。神ご自身が、それ自身単純で、対象として《独自に実存しているもの der für sich Existierende》ではない。ここに《神が愛である》ことが証言される。《愛》とは、神の直接法の命題を規定するの述語ではない。また、人間の類推によって解明することのできる既定の事柄ではない。神の言によって開示される《新しい言の出来事》である。《愛》は、われわれにとって内実の不可知な、しかし、《我》の根拠としての、神の側からの《出来事》である。⁽¹⁵⁾

ここで十分に、神学史における反省をふまえておかねばならない。

《神学ほど、あらゆる種類の人間の傲慢によって脅かされる企てはない。》⁽¹⁴⁾神学 theologia; theologos は《語ること logia; logein》である。神学の主題は人間実存にとってのきわめて終末論的な出来事である。この出来事こそ、神の啓示としてのイエス・キリストの出来事である。この出来事を語る時、新約聖書は《奇跡》という様式において発言する。ブルトマンによれば《奇跡》は《観察》さるべき対象ではなく、《解釈》さるべき主題であり、それゆえ《自然法則》に反した不可思議な現象としての《異象 Mirakel》ではなく、神の行為であり、人間には、神が語りかけ《我》にとってかくされている。⁽¹⁷⁾それゆえある出来事の《宗教的表現》として、一般的な思想体系によって、解明されつくされるような、《処理可能な、完結した世界を前提とするようなものではなく常に信じてゆくこと semper credendum それが、キリスト者が常に恩寵のなかにいる》⁽¹⁸⁾《いつも新しい奇跡》としての出来事のなかにいることである。

《人間のあらゆる不遜のなかで、人が一般に宗教と名づけるものも

つ途方もない不遜》を拒否しなければならない。《なぜなら、宗教というものは、絶対的な対立に、すなわち創造者と被造者の対立に、被造者の方から架橋しようとする不遜であるからである》。

これらにおいて示される事態は、K, バルト (1886-1968) が、《宗教とは不信仰である。人間が自己の理想像、投影像の前に自ら義たろうとし、自ら聖たろうとする人間的試みである。》(教会教義学 I/2・1938年)と一致する神学史的認識である。

D・ボンヘファー (1906-1944) によれば、《絶えず僕を動かしているのは、そもそもキリスト教とは今日われわれにとって何であるのか、またキリストとは誰れであるのかという問題である。……内面性と良心の時代、すなわち、一般に宗教の時代もすぎ去った。われわれは完全に、無宗教の時代を迎えている。……われわれはどのようにして〈この世的に〉〈神〉について語るものであろうか》。(20) 《彼はしばしばその思索を中断させられる現代を象徴する状況のただなかで、しかし、くりかえし、これらの問題に固執してやまない。《われわれは、宗教なしに、すなわち、まさに形而上学や内面性等時間的制約を受けた前提なしに、どのようにして神について語りうるか》《宗教》の形式としてのキリスト教はいまや存在しない。

いまや《人間が、あらゆる重要な問題において、〈神という作業仮説 Arbeitshypothese〉の助けなしに、自分自身を処理することを学んだ《一切は〈神〉なしに、相変わらずうまく進んでいるように思われる》。他方《宗教的人間とは、人間の認識のゆきづまる時か、人間の諸能力が役立たなくなった時に、神について語る》《その神こそ、いつも急場しのぎの機械じかけの神・Deus ex machina である。したがって、神をひきあいだすとき、つねに人間の弱さを食い物にするために、つまり人間の限界につき当たった時なのである》。(12)

《人間は、実際に神を失った世界の中で生きなければならず、しかも、この世界の無神性を何らかの仕方で宗教的に掩い隠したり、神聖化したりしてはならない。彼は〈この世的に〉生きなければならず……〈この世的に〉生きることがゆるされている。すなわち、彼は誤った宗教的束縛や障害から自由になされているのだ。キリスト者であるということ

神の問題

は、一定の様式で宗教的であったり、することではない。キリスト者であることは、人間であることだ。キリストは僕たちのうちに、一つの人間類型ではなく、人間そのものを造り給う。宗教的行為がキリスト者をつくるのではなく、この世の生活のなかで、神の苦しみにあづかることがキリスト者をつくるのだ⁽²²⁾》。

このようにして、彼はいまや《宗教的に》ではなく《この世的に》なった現代を《成人した世界 die mündig gewordene Welt》とよぶ。ここでは《神》を《後見人》とすることは《非キリスト教的である⁽²³⁾》なればなら、《キリストを人間の宗教性のある特定の段階ととりかえようとする⁽²⁴⁾》に他ならないからである。

成人した世界においては《神は、僕たちが神なしに生活できるものとして生きなければならないことを僕たちに知らしめ給う。僕たちと共に給う神とは、僕たちを見捨て給う神なのだ (Mk 15: 34)。神の前で、神と共に、僕たちは神なしに生きる。神はこの世においてはよわい。そして神はまさに、このようにしてのみ僕たちのもとにおり、また僕たちを助け給うのである。キリストは彼の全能によってではなく、彼の弱さを彼の苦難によって僕たちを助け給う⁽²⁵⁾》。

聖書に示される神は、神を見失った人間にたいして《神について宗教的に語ることをやめる。ここで語られる神は、神であることを放棄した無力な神》である。成人した世界では《もはや全能・全知・遍在などに関する普遍的・思弁的な理解⁽²⁶⁾》を人間によって達成しうるものではなく《神について〈非宗教的に〉語ろうとする時には、世界の無神性が何らかの仕方でおおわれるものではなく、むしろ暴露され、まさにそれゆえに驚くべき光が世界を照らすように神について語らなければならない⁽²⁷⁾》。

《宗教的行為は、必ず部分的なものであり、〈信仰〉は全体的なものであり、全生活にわたる行為なのだ。イエスは新しい宗教へと召し給うのではなく、生へと召し給う⁽²⁸⁾》。この生においては《キリスト教の深いこの世性・Diesseitigkeitを深く学ぶ⁽²⁹⁾》。《この世性とは……豊かに成長を見た……死と復活との認識が常に現在的である⁽³⁰⁾》ことである。そして《この世性の中に完全に生きぬくことによって初めて信ずることを学ぶ⁽³¹⁾》

のである。このようにして《この世性の完成としての成人性》⁽³²⁾のただなかにおいて《神は……彼岸的である》この《彼岸性》こそ、《イエスが〈他のために存在する Für andere-Da-Sein〉という》⁽³³⁾《超越性》であり、決して認識論的な超越性ではない。

(四)

現代において神の主題をめぐって展開される神学的思惟とは、その学としての思考において、その体系的な営為を積極的に徹底化することによって、いわば自己完結的な、宗教哲学に到る道を歩みだしてゆくことではない。むしろ、このロゴスでは、主題をめぐって問う者みずからが、思惟の体系性においてかえって示される完結性を、神の言によって、つねに新たに可塑性へと変革しなければならない。しかし、この可塑性は一定の論理的図式のなかに、神を解体せしめてはならない。⁽³⁴⁾神は、端的に、徹底してみずからをかくし給う神 Deus absconditus であり、自己開示する栄光においてひとりの方ではなく、苦悩において、共にいたもう方である。

いまや《神》という表現形式が問題なのではない。まさに《敬虔なユダヤ人が神の名をあらわさなかつたように〈主〉〈汝〉とよびかける言語によってむしろおきかえられるべきものなのである。決定的なことは呼びかけを断念できないことである。これこそ実存の叫び (G. Ebeling)⁽³⁵⁾であり、祈りである。》。

それゆえ神とは、応答の祈りの出来事である。かくて神の問題とは、神の愛に対する応答の祈りにおいて、生起する現実のただ中で、告白される事態⁽³⁶⁾である。

(付記) 本稿は 1976 年度北海道キリスト教会会での研究発表の草稿をもととして、新たに書きあらためたものである。主題に対する第 1 の刺戟は Evangelische Theologie 1975 5/6 zur Gottesfrage 所収の論文 Bertold Klappgrt: Tendenzen der Gotteslehre in der Gegenwart 1974 年の Göttingen 大学神学部教授就任講演である。

神の問題

註

- (1) R. Bultmann: *Glauben und Verstehen II* S. 227.
- (2) I. カント: 啓蒙とは何か, 岩波文庫, 7頁。
- (3) E. カツシーラ: 啓蒙主義の哲学, 1932, 邦訳, 198頁。
- (4) 小川圭治: 主体と超越, 1976—53, 54頁における引用 カント・アカデミ版 7 S. 23, S. 67.
- (5) *ibid*
- (6) M. Heidegger: *Identitat und Differenz* S. 70.
- (7) Ders. *Wozu Dichter* S. 248.
- (8) Wüler-Schwefe. Hans Ruduff: *Existenphilosophie* 1961. S. 69.
- (9) H. H. Schrey: *Die Bedeutung der Philosophie M. Heideggers für die Theologie* (in M. Heideggers Einfluss auf die Wissenschaften Festschrift 1949. S. 16.
- (10) M. Buber: *Gesammelte Schriften I*: 1962 S. 599.
- (11) R. Bultmann: *Glauben und Verstehen I*. S. 26 ff.
- (12) H. Ott: 神 1975 邦訳 171頁以下。
- (13) H. Braun: *Gesammelte Studien zum Neuen Testament und seiner Umwelt* 1967² S. 341.
- (14) H. Ott: 神 1の75.
- (15) E. Jüngel: *Gotres Sein ist im Werden* 1965.
- (16) 山本 和: 神学的思惟の基礎概念, 聖書と神学 7号 1962, 4頁。
- (17) R. Bultmann: *Glauben und Verstehen I*. S. 214 ff.
- (18) 熊沢義宣: プルトマン 増訂 1967, 178頁。
- (19) F. Gogarten: *Die religiöse Entscheidung* 1921 S. 20.
- (20) D. Bonhöffer: *Widerstand und Ergebung* 1961 邦訳 181頁以下, 229頁以下。
- (21) *ibid*
- (22) *ibid*
- (23) *ibid* 228.
- (24) 熊沢義宣: ドイツにおける世俗化論 現代社会と教会 I 1970, 138頁。
- (25) Bonhöffer: *ibid*
- (26) 熊沢義宣: 現代の無神性 明日の神学と教会 1974 87頁。
- (27) Bonhöffer: *ibid* 255頁。
- (28) *ibid* 258頁。
- (29) //
- (30) //
- (31) *ibid*. 61頁。
- (32) Klaus Bümlein: *Mundige und Schuldige Welt* 1974 S. 20.
- (33) Bonhöffer *ibid* 273頁。
- (34) G. Ebeling: *Existenz zwischen Gott und Gott* Zeitschrift für Theologie und Kirche 62 Jg 1965 S.S 86-113.
- (35) H. Ott: 神 1971 邦訳。
- (36) E. Jüngel: *Gottes Sein ist im Werden* 1965.

Zur Gottesfrage — nach den verschiedenen
Gotteslehren in der Gegenwart.

Yukimaro AMAGAI

Das Reden von Gott wäre heute nur dann sinnvoll und notwendig, wenn diese paradoxe Gotteserfahrung des säkularisierten Menschen, die Erscheinung des entschwundenen Gottes, jene andere widersprüchliche Selbsterfahrung des Menschen nur verdeckt, aber nicht beseitigt, nämlich von Gott nicht reden zu können und doch von Gott reden zu müssen.